

P&G COMMUNICATION & INFORMATION

Ferdinando Frega — Nando the Scribe



P&Gのコミュニケーションと情報

情報

最初にコミュニケーションをとったのは、服を着ていない原始人だった。最初に情報を伝えたのは、服を着て、記者証を持った原始人だった。

どちらも原始人だ。何も変わっていない。ただ、前者は人生を生き延びなければならず、後者は、生き延びた者たちを生き返らせることで食っている。

だが、議論や批判をしている暇はない — そういう営みを、私は一度もやったことがない。

私がしたいのは、両者の人類学的な違いを、物語を通して語ることだ。

コミュニケーションの最初の本当のかたち — ここで誰もが椅子から飛び上がるだろうが — それは沈黙である。

言葉より前、声より前、身ぶりより前、姿勢より前に、沈黙という実践はいつも、処理し決断する能力によって、その人の知性を測ってきた — その逆は決してない。

そして男たちは寄り集まり、黙ったまま、星を、抽象を、想像されたものを眺めていた — やがて遠くで、自分たちしかいないと信じきった女たちの一団が、仲間うちで話しはじめるまで。低い声、抑えた調子、抑えたりズム、整った抑揚、ひと言ひと言が念入りに置かれている。女とはそういうものだ。

だが、沈黙が人類に残した最初の教えは、内にこもる慎みのようなものではない — ひとつの方法であり、本当の決断が下されるあらゆる場所の内側にある、最後の辺境だ。

それでも、沈黙の内側の騒音だけは決してなくなる。それは内から来る。感情的で、認知的で、論理的かつ理性的で、本能的で、情愛的で、そのすべてが一

度に来る。

そしてここでも、それを本当に扱える唯一の者は、あいかわらず女たちだ — あまりに完全で、あまりによく機能するので、人間の生殖を先へ運ぶ務めまで与えられた。(ほかの領域 — 生物学的な、細胞の領域 — には、子を産む雄もいる。だが、それは別の種類のコミュニケーションだ。)

ここで触れなかった残りのすべては、ひとりひとりの経験にゆだねる — それこそが、私たちという存在のいちばん良い部分だ。

情報というと、子どものころにやった遊びを思い出す。みんなで輪になり、最初のひとりが隣の人の耳に言葉をささやく。それが12人を順に伝わっていく。反対の端から出てくるものは、たいてい大爆笑だった。

この遊びは、ひとつの単語でも、まるごとの文でもできた。そして、こういうことが起きた。

「生きる」で始めると、12回伝わったあと、反対の端から出てきた言葉は「死ぬ」だった。

「彼が生きるとみんな知っていた」のような文で始めると、12回伝わったあとには、「彼が死んだとみんな知っていた、葬儀は12日の12時」になって戻ってきた。はははは。

今日、メディアが情報を動かすのを、私はまさにそうやって眺めている — ひとつの記事の同じ書き出しが、媒体から媒体へと、違ったふうに報じられていく。子どもの遊びだと思っていたものは、じつは情報産業についての苦い真実だ。そこではもう、新聞売り場と編集部の違いがなくなっている。

結局のところ、この二つは一本の糸でつながっている — どちらも同じ原始的な起源の子どもだ。人がどう服を着るかを見れば、それでわかる。

よい読書を。

フェルディナンド